

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 楊 佳嘉

論 文 題 目

『女人芸術』の人々と中国——植民地的近代と女性作家の文化生産

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学教授	星野 幸代
委員	フェリス女学院大学教授	島村 輝

## 論文審査の結果の要旨

### 〔本論文の概要〕

本論文は、雑誌『女人芸術』（発刊一九二八年～終刊一九三二年）に関わって執筆した女性作家たちが中国を表象したテキストを取り上げ、彼女たちがいかに中国と自己を語ったのかについて検討し、彼女たちの文化生産の過程において中国がどのような機能と意義を持ったのかについて論じたものである。近年、日本文学における中国表象や、日中文化交流についての研究は増加しているが、時期としては日中戦争開始後、地域としては満洲および上海に関心が集中してきた。それに対して、本論は一九二〇年代から三〇年代中期までを視野にいれ、地域を限定せず、これまでにあまり研究が進んでいない女性作家のテキストを対象として、トランスカルチャーとインターセクショナリティの視点を組み込み、分析を行った。

全体は二部構成となっている。第一部「表象としての中国」では、中国表象の多様性を論じた。第一章では、『女人芸術』における中国表象の全体像を明らかにした。中国関連の記事を網羅的に抽出して数量的には前期に多いことを確認しつつ、モダン文化が発展している様子や、女性解放の点での先進性などが、反帝国主義とエキゾチックなまなざしを交錯させつつ言及されていることを論じた。『女人芸術』は、当時の女性作家が集結した雑誌であり、その中国表象を共通的な認識の基盤として捉えることができる。第二章からは、個々の女性作家の作品を分析対象とした。第二章と第三章では平林たい子の「投げ捨てよ！」「施療室にて」「敷設列車」の三つの小説をとりあげ、植民地空間においてジェンダーと階級と民族が交差的に構成されていることを指摘した。第四章では、中本たか子「東モス第二工場」をとりあげ、女工の身体表象における階級とジェンダーの交差性を論じ、中国の革命運動が自己形成の装置に組み込まれていることを指摘した。

第二部「旅行体験としての中国」では、中国を旅行した女性作家たちのトラベル・ライティングに注目した。第五章では、森三千代が自身の経験を素材として執筆した小説「病薔薇」をとりあげ、主人公と中国の女性作家との交流を分析し、緊張関係と連帯の可能性の重なりを明らかにしつつ、男性のまなざしに抵抗する女性作家としての記述の有り様を論じた。第六章と第七章では、林芙美子の一九三〇年代の中国旅行の語りを分析した。第六章では、同時代の与謝野晶子や吉屋信子の記述と比較しつつ、林芙美子の階級的な属性と中国体験の関係を論じ、第七章では「日中親善」の語りにおける、中国に対する複雑な姿勢や文化侵略の思想との接続性を明らかにした。

以上の分析によって、日中文化交流の観点から、従来十分に検討されてこなかった女性作家による文化生産の動向を明らかにした。一九二〇年代から三〇年代にかけての女性作家たちの中国表象の多様性を確認するとともに、女性解放における中国の先進性が共通認識となっていたことを指摘し、それを東アジアにおける植民地的近代性の特徴として論じた。

## 論文審査の結果の要旨

### 〔本論文の評価〕

日本文学における中国表象、日中文化交流についての先行研究は、男性作家・知識人を主たる対象として、時期としては日中戦争以後、地域としては満洲と上海に関心が集中してきた。それに対して、本研究は、女性作家による一九二〇年代から三〇年代中期のテクストを対象とし、その中国表象の多様性を指摘した。研究目的は明確で、適切に研究対象が選定されたうえで新たな知見が提出されており、完成度の高い論文として評価された。各章は様々な学術雑誌に採択された査読付き論文によって構成されており、学術的な評価を得ていることも確認された。

第一に評価されるのは、女性作家の中国表象を複数取り上げ、多角的に検討した点である。個々の女性作家については個別に先行研究があるが、それらを総合的に検討することで、中国表象の多様性が明らかにされた。近代日本にとって、中国はきわめて近い距離にある他者である。他者表象は、自己形成の契機ともなる。本論はこうした自他関係をふまえ、中国表象の分析と同時に、日本人女性としての自己形成における関係を論じた。とくに独自性が認められるのは、日本の帝国主義を前提とした日中戦争後の中国表象が侵略の対象として同質化しがちであるのに対して、日中戦争以前の女性作家への注目によって、女性問題における中国の先進性に対する認識に光が当てられ、日本の遅れに対する反省をともなった自己表象の側面が見出されたことである。また、民族や国家の力学に、階級やジェンダーの力学が交差することで、中国の女性や労働者との連帯や、日本内部の差異が認識される様相が明らかにされた。

第二に、日中の女性作家交流における新たな知見が評価された。第五章では、森三千代が中国の女性作家白薇との関係を描いた小説をとりあげ、日中双方の男性中心的な視線によって形成されたそれぞれの女性作家イメージに対する抵抗と、連帯の可能性を指摘した。また林芙美子について、とくに第七章で、先行研究が未だ多くない北京での文化交流が検討された。またその「親善交流」をめぐって、日中双方の同時代言説を調査することで林芙美子の姿勢の二面性が明らかにされ、「親善」が女性ジェンダー化されつつ侵略の装置の一部になっているという問題提起的な指摘がなされた点も評価された。連帯と侵略という二つの極の間で、個々の女性作家がそれぞれに中国との関係の中で自己の立場を形成していく様相が多角的に明らかにされた。

一方、問題点も指摘された。論の枠組みが鮮明である一方で、作家という生身の主体に踏み込む度合いが薄く感じられるということや、理論的なキーワードが個々の指摘に限定して用いられており、博士論文全体に一貫して機能していないということが指摘された。ただし、それらの点は今後、検討されるべき課題といえるが、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。